

## 1 か月かけて届いた子どもの思い

富山国際大学 子ども育成学部  
教授 三原 茂



先日、ある小学校の研究会に参加しました。社会科の授業を参観したのですが、筆箱（今もこの言葉で伝わるのか不安なのですが）が机の上になく、子どもは45分間の授業で一度も鉛筆を握ることがなかったのです。目の前のタブレット型端末から担任の先生からのコメントを受け取り、その端末に友達の意見や自分の考えを入力していました。時代はもうここまで来たのかと、驚きを隠すことはできませんでした。と同時に、少し不安にもなりました。

私が最後に勤務した小学校でも、毎日、登下校のときに、多くの地域の「見守り隊」といわれる方々が通学路に立って、子どもたちの安全を見守ってくださっていました。校舎の南側の交差点にある横断歩道では、鈴木さんという方が毎日、見守り活動を行っていました。

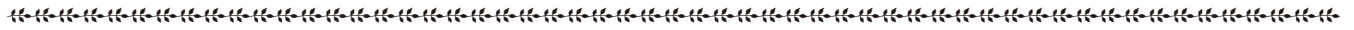
6月14日早朝、鈴木さんの大切な方がお亡くなりになりました。それはとてもとても悲しいことで、鈴木さんは大変落ち込んでいました。体も心も元気がなくなり、いつもの場所に立てなくなりました。私も、別の見守り隊の方から、近頃全く見かけなくなったというお話を聞いており、心配していました。ひと月後、鈴木さんは家族の方から「亡くなった大切な方は見守り隊に行かないことを望んではないよ。行ってあげないと」と、言われたそうです。そして、7月17日の朝、久しぶりに横断歩道のところに、見守り活動に立たれました。すると、毎朝鈴木さんの前を通っている小学生の女の子が、鈴木さんに手紙を渡しました。そこには、右上のようなことが書かれていました。

少し夏の暑さを感じる季節となりました。毎朝私たちを見守っていただいて、本当にありがとうございます。見守り隊の方の「おはよう」という挨拶を聞くと、とてもよい気持ちになります。わたしも、みんなが気持ちのよくなる挨拶ができるようになりたいです。これからもよろしくお願いします。 6月14日 風子より

この手紙を書いた日が6月14日でした。鈴木さんのとても大切な方がお亡くなりになった日で、見守り活動に出ることができなくなった日です。そして、再び横断歩道に立ったその日にこの手紙が鈴木さんに手渡されているということは、1か月の間、ずっと風子さんはこの手紙をもって登校していたのです。その後、鈴木さんは来校され、「風子さんは手紙を握りしめて登校していました。かわいらしい封筒は少しくたびれていましたが、きれいな字で、4年生とは思えないほど丁寧な言葉遣いの手紙でした。私を待っている人がいることに、とても幸せな気持ちになりました。」とお話されました。

子どもは幼稚園時代、七夕や生活発表会の際等、事あるごとにメッセージカードや手紙を書いたり、もらったりしています。たとえ上手ではなくても、人がかいた文字や絵でこそ伝わる確かな思いがあることを、経験を重ねて学んでいるのです。

わたしたちの生活は、パソコンやスマートフォンの使用が当たり前になり、瞬時に多くの情報を得たり、メールやSNSで手軽に連絡を取り合ったりすることができます。しかし、思いを伝えることについては、子どもの方が上手なのかもしれません。



## 個の教育

全日本私立幼稚園連合会  
会長 田中 雅道

どうして人は、一人で生まれてくるのでしょうか。  
人も生物ですから、種を保存するのに最適な方向に進化を遂げてきたはずです。一回の出産で複数の命を授かれば、生まれてきた命のどれかが残ることによって種を保存できるのですが、人は進歩するにしがたって、一回の出産で一つの命を授かるということに意味をおいてきたはずです。そう考えれば、有史以来、双子の出産から一人の命を授かるという変化が起こったという話は聞いたことがありませんから、人としての歩みを始めた頃から、生まれてくる命が一つになったのだと考えていいのではないのでしょうか。

私が学生の頃ですから、今からもう50年ほど前の話になりますが、生まれてくる赤ちゃんはいつから目が見えているのだろうという疑問に対して、様々な実験が行われました。その結果、それまで通説とされてきた、生まれて2～3週間で目が見えるという説から、生まれてすぐに見えているという考えに代わってきました。

では、赤ちゃんが変わったのかということそうではなく、生まれてすぐ見えるのは、まどろみ状態の機嫌がいい時で、20センチ程度のところだけが、ぼやっと見えているのだということが分かってきたのです。赤ちゃんが初めて目にする光景は、おっぱいを含んで、おなかがいっぱいになった、機嫌のいい状態の時に、お母さんの口元、顔の輪郭が、カスミがかかったような状態で見えているという景色なのです。

私はこう言った状態は、人が成長していく過程で

重要な役割をする“ことば”を習得するために、お母さんの口元の動きを最初に学習させることに意味をおいた結果なのではないかと考えています。空腹が満たされ機嫌がいい状態で、お母さんが発する言葉が耳から聞こえてくる状態で、その口元に視線が行くようになっている仕組みは実に巧妙です。もちろん、赤ちゃんが空腹を満たすのは母乳だけである必要はなく、哺乳瓶であっても何ら変わりはありません。ただ、空腹を満たされた状態の時に誰かが温かく言葉をかけ、その時の状態であったり何気ない会話であったりでいいのですが、言葉をかけられ、その言葉が初めて見る景色の口元から出ていることを学習するという事は大きな意味があったのではないのでしょうか。

このような一連の行動を教育という言葉で定義されるのかどうかは分かりませんが、人が成長していくのには、自然で意味のある個別の刺激が影響を及ぼしていると考えすることは、自然な流れだと思います。“ひとりひとりの教育”という難しいことのように思われがちですが、人が成長していくのに必要な個別の刺激、これが人へ育っていく個の教育の始まりだと思っています。この“個の刺激”の時代を経て、幼稚園に入って“集団”での刺激を受けることによって成長していく過程、変化が成長です。

今まで幼稚園教育は、集団での教育に力点が置かれてきたのですが、個の教育の視点も新たに加えて教育していく時代を迎えたのだと思っています。